

## 考える大人の書き方読本 実用編

### 目次

1. 書き方心得－実用編.....	2
1.1. 全体概要.....	2
1.1.1. 解説の仕方.....	2
1.1.2. 解釈の明確さ.....	2
1.2. 語（ワード）.....	3
1.2.1. 名詞の使い方（1）.....	3
1.2.2. 名詞の使い方（2）.....	3
1.2.3. 形容詞の使い方.....	4
1.2.4. 述語の使い方.....	5
1.3. 文（センテンス）.....	6
1.3.1. 全称文と総称文の区別のしかた.....	6
1.3.2. 日本語特有の主張（宣言）のしかた.....	7
1.3.3. 「指示」の仕方.....	7
1.3.4. 主語（視点）の使い方.....	8
1.4. 段（パラグラフ）.....	9
1.4.1. 「問題解決型」の文章構成のしかた.....	9
1.5. おわりに.....	11

## 1. 書き方心得－実用編

### 1.1. 全体概要

本書（「書き方心得 実用編」）では、書き方の心得を具体的な用例（書き換え前と書き換え後）を示しながら解説します。

「理論編」では、文章タイプには説得型の筋書きと共感型の筋書きがあることを述べました。「実用編」が対象としている文章は、「共感型」の筋書きです。より具体的には、ビジネス分野において、利害関係者である書き手と読み手が共感を得、具体的な行動につながる結論を出す「問題解決型」の文書です。

#### 1.1.1. 解説の仕方

「理論編」の「視点の表現法」（14 ページ）で述べたように、思考には、大きく2つの視点の捉え方があります。ひとつは、外界視点（説得型筋書、食パン一斤モデル）によるものであり、これは決定論的で、世界を「単一空間とそれに属する線状の連続時間から成る」と捉えるものです。もうひとつは、内界視点（共感型、食パン一枚モデル）であり、これは確率論的で、世界を「順序付けられた複数空間と離散時間から成る」と捉えるものです。言語は思考の表象ですから、言語表現は、この2つの思考方法の投影だと言えます。典型的には、外界視点による思考表現は、西洋言語に好まれ、内界視点による思考表現は、東洋言語に好まれます。例えば、九鬼周造は『時間の観念と東洋における時間の反復』（[九鬼周造著、小浜善信編]：9頁～30頁）の中で、西洋哲学には連続する時間という考え方があるのに対して、東洋には永続と瞬間の時間という考え方があると説明しています。

東洋の一言語である日本語は、その傾向として時間経過の解釈が離散的であり、その結果、状態表現が多用されることから、思惟（推論）をする際に、しばしば個々の結果状態から一般的な規則を見出そうとする構造を持ちやすいと考えられます。つまり、確率的で帰納的な思考に、より適した構造を持つのです。「実用編」の解説では、このような日本語の言語特徴の解説をするだけでなく、それがより理解しやすいように、読者に身近な西洋語である英語と対比させながら説明をします。

#### 1.1.2. 解釈の明確さ

「実用編」が対象とする、問題解決を旨とする文章では、理想的には、書き手と読み手の意味解釈にまったくゆれがないように書くことです。しかし、そのためには、論理式を使い、厳密な演繹推論を適用せねばなりません。それを通常の言語運用に常に適用するのは、現実的ではありません。目指すところは、言語で表される概念の示す範囲を明瞭にし、書き手と読み手の間で何が共有されるのかを正しく認識することで、できるだけ意味解釈のゆれを小さくすること、そして努めて合理的に書くことです（「理論編」の「合理的な態度」、19 ページ）。

それでは、意味解釈のゆれは、どのようなときに生じるのでしょうか。それは、語・句・文・文章のいずれの段階にも生じ得ます。そこで、読み手が問題点に焦点をあてやすいよう、それぞれの段階

別に用例を挙げて説明をします。

## 1.2. 語（ワード）

「理論編」では、モノは不動点由来の意味と不変点由来の意味に分けることができる（9 ページ）と説明しました。前者は個物（外形存在）で、後者は代物（役割存在）です。個物とは、それが位置変化しても、知覚的（特に視覚的）な観点で同一であることを判断することができるモノです。それに対して代物とは、それが質変化しても、認識的（特に推察的）な観点で役割が変わらないことが判断できるモノです。この捉え方は、日本語と英語の名詞の意味内容に反映されています。

### 1.2.1. 名詞の使い方（1）

#### 1.2.1.1. 解説

日本語の名詞は、モノのもつ役割や機能に名付けをする傾向が強く、役割存在としての意味を表します。それに対して英語では、具体的な存在物を指す傾向が強く、外形存在としての意味を表します。そのため、英語の名詞表現は、知覚的な表現になりやすく、日本語の名詞表現は認識的な表現となりやすいと言えます。認識的な表現は、抽象的になりやすいので、具体的に表現するには、「内実のらしさ」つまり、どの視点からその名詞を用いているのか、修飾語句を使って明示するように心掛けましょう。

#### 1.2.1.2. 書き方例

修正前	修正後
その賃金では、 <u>人</u> は集まらない。	その賃金では、 <u>期待する技能をもつ人</u> は集まらない。〔修飾句を使って視点を示す。〕 
日本の古都である京都の魅力を、 <u>世界</u> の人々に宣伝したい。	日本の古都である京都の魅力を、 <u>欧米や東南アジア</u> の人々に宣伝したい。〔事例を使って視点を示す。〕

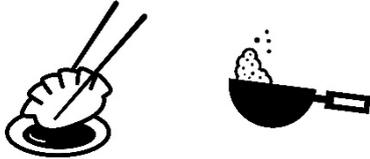
### 1.2.2. 名詞の使い方（2）

#### 1.2.2.1. 解説

日本語の名詞は、経験や体験を通じて認識したモノの役割や用途を表象したものです（「理論編」の「表現の意味を選ぶ」、5 ページ）。役割や用途は、モノをどの視点から捉えるかによって様々です。例えば、同じ石でも、石垣を築くために用いれば築石ですし、漬物を作るために使えば漬物石です。

文章の書き手は、名詞を用いる際に、頭では具体的な役割を思い描いているのですが、読み手もわかっていると思ひ込み、しばしばそれを書き忘れがちです。名詞は、どのような役割で用いているのか具体的に書きましょう。

### 1.2.2.2. 書き方例

修正前	修正後
私は <u>中華料理</u> が苦手である。	私は <u>中華料理を食べる</u> のが苦手である。 私は <u>中華料理を作る</u> のが苦手である。 
<u>ガス</u> が壊れたので修理したい。	<u>ガス管</u> が壊れたので修理したい。 <u>ガス器具</u> が壊れたので修理したい。

### 1.2.3. 形容詞の用い方

#### 1.2.3.1. 解説

形容詞は「丸い」のようにモノの形状や材質を表す内属属性のほか、「美しい」のように人が認識評価する外属属性を表すものがあります。文法書でいう、性状形容詞と情意形容詞です。この2つの区別は、「理論編」で、モノの意味が、不動点由来（形状由来）の意味と不変点由来（認識由来）の意味に分けることができる（9ページ）という説明と符合しています。

日本語で認識したモノの具体性を示す際、とくに情意形容詞を使う場合は、修飾語句を使って「内実のらしさ」を具体化するよう心掛けましょう。以下に例を示します。具体性の持たせ方を〔 〕内に示しています。

#### 1.2.3.2. 書き方例

修正前	修正後
その駅の利用者は <u>多い</u> 。	その駅の利用者は <u>1日平均10万人を超える</u> 。〔具体的な数値で表す。〕
このキッチン <u>使いにくい</u> 。	このキッチンは <u>作業同線が悪い</u> 。〔評価の対象を具体的に示す。〕
新しい社員証のデザインは <u>評判が悪い</u> 。	新しい社員証のデザインは <u>社員に評判が悪い</u> 。 〔評価者を示す。〕
法隆寺は <u>古い</u> 。	法隆寺は <u>東大寺よりも古い</u> 。〔評価の基準を示す。〕

## 1.2.4. 述語の用い方

### 1.2.4.1. 解説

物事が「在る」ことの確実性の度合いには、2つの解釈があり得ます（「理論編」の「確率と蓋然性」、20 ページ）。頻度主義的な言語表現では、物事が繰り返り起こることを認めつつ、それが一回性のことか習慣性なのかを意識して記述します。ベイズ主義的な言語表現では、物事が起こることについての合理的な信念の度合い（尤もらしさ）を意識して記述します。

また、「理論編」では、出来事の捉え方として、動きの繰り返り性を容易に表現できる複相事態と、動きの状態変化（推移）しか示さない単相事態があることを説明しました（「理論編」の「複相事態と単相事態」、13 ページ）。日本語では、動詞の意味内容として単相事態を表しやすいので、出来事を叙述するときには、数量副詞を用いるなどして、出来事の繰り返り性の有無を具体的に表現し分けることが重要です。さらに、必要に応じて、出来事が「ここ今」を含む線状時間帯で繰り返される出来事なのか、「より前」（過去）の線状時間帯で繰り返された出来事（過去の習慣）なのかなどを意識して表します。具体性の持たせ方を、〔 〕内に示します。

### 1.2.4.2. 書き方例

修正前	修正後
昨日のプレゼンでは、緊張して <u>全然話せなかった</u> 。	昨日のプレゼンでは、緊張して全然思うように話せなかった。〔出来事の生起の有無ではなく、出来事に対する信念の度合いを表す。〕
山田君は、課長に休暇を取るメールを <u>出しています</u> 。	山田君は、課長に休暇を取るメールを出したと言っています。〔間接性を使って尤もらしさを表す。〕
生命保険業界は、今後 20 年 <u>成長し続ける</u> 。	生命保険業界は、今後 20 年成長し続ける <u>可能性が高い</u> 。〔(頻度主義的な) データ分析の結果から推論〕 経験上、生命保険業界は、今後 20 年成長し続けるはずである。〔(頻度主義的な) 業界の経験値からの推論〕 私は、生命保険業界は、今後 20 年成長し続けると思う。〔(ベイズ主義的な) 尤もらしさの推論〕
彼は、そのプロジェクトの問題点について <u>議論した</u> 。	彼は、そのプロジェクトの問題点について <u>先週の会議で議論した</u> 。〔一回性の行為として出来事を表す〕 彼は、そのプロジェクトの問題点について <u>3 度にわたり議論した</u> 。〔繰り返り性のある行為として出来事を表す〕

	彼は、そのプロジェクトの問題点について <u>議論</u> を重ねた。〔繰り返し性のある行為として出来事 を表す。但し、不特定数回の行為〕 彼は、そのプロジェクトの問題点について <u>議論</u> したものだ。〔繰り返し性のある行為として出来 事を表す。但し、過去の習慣としての行為〕
--	--

### 1.3. 文（センテンス）

1.1.2 節で説明したように、言語で表される概念の範囲を明瞭にし、書き手と読み手の間で何が共有されるのかを正しく認識することは、意味解釈のゆれを小さくします。これは、単語レベルにとどまらず、文レベルにおいても同様です。

物事を文にした場合、概念解釈には、いくつかのタイプが考えられます。例えば、「日本人は英語が苦手である」という文では、個々人が知覚したり体験したり経験したりする個別の物事－物事の個別性、個別の物事を集めて一般化した総称性があると解釈できます。また、「人は死ぬ」であれば、個別の物事を集めて一般化した群－物事の全称性があると解釈できます。（「理論編」の「物事の表現の意味を選ぶ」（5 ページ）や「叙述のための表現法」（17 ページ））。

英語は、物事の意味を個物として表しやすく、個物は数え上げができますから、全称の意味（集団としての傾向を一般化の概念とすること）と、総称の意味（抽象化された概念）を区別しやすいと言えます。日本語は、物事の意味を代物で表す傾向があるので、個別性は持つものの、数え上げられませんから、全称・総称の意味の区別が希薄です。2者の違いを明確にする必要がある場合には、表現を補足しなければなりません。

#### 1.3.1. 全称文と総称文の区別のしかた

##### 1.3.1.1. 解説

一般的に、「日本人は英語が苦手である」という文を読んだ場合、これは、「日本人は英語が苦手な傾向がある」という総称的な意味を持つという解釈が可能です。同様の文型を用いても、「人は死ぬ」では、全称文と解釈できます。日本語文「日本人は英語が苦手である」は、背景知識（これまでに死ななかつた人がいないこと、日本人にも英語が得意な人がいること）なしに、この2つの意味を区別することができません。

ビジネス文書を書く際には、読み手の背景知識を推測することも大切ですが、適切に表現を書き分けることも必要です。

##### 1.3.1.2. 書き方例

修正前	修正後
若者はポップ音楽を好む。	若者はポップ音楽を好む傾向がある。〔一般的な傾向：総称文です。〕

	どの若者もポップ音楽を好む。〔個物として「若者」を使う：全称文です。〕
--	-------------------------------------

### 1.3.2. 日本語特有の主張（宣言）のしかた

#### 1.3.2.1. 解説

「日本人は英語が苦手である。」という日本語表現に対し、この文が総称文なのか全称文なのかという区別のみを議論することには違和感があります。日本語は、名詞の意味が代物（役割存在）を表す傾向が強く、複数空間と離散時間が想起されますから、そもそも数を基本とした全体集合が想定できません。多くの場合、この文は、ある視点に基づいた観察に裏付けられた「信念」を表しているのです。そのため、より正確に記述するには、誰の視点から述べられているのかを意識して表現仕分けしましょう（参考：「理論編」の「叙述のための表現法」（17 ページ））。

#### 1.3.2.2. 書き方例

修正前	修正後
日本人は英語が苦手である。	日本人は英語が苦手である <u>と言われる</u> 。〔世間の一般的な信念：全体集合の想定はしない。〕 日本人は英語が苦手だ <u>と思う</u> 。〔書き手の信念：全体集合の想定はしない。〕 日本人は英語が苦手 <u>である</u> 。〔書き手と読み手の共通理解：全体集合の想定はしない。〕

### 1.3.3. 「指示」の仕方

#### 1.3.3.1. 解説

「指示」については、理論編の「指示と共有、固有」（6 ページ）と「叙述のための表現法」（17 ページ）で説明しました。出来事には、不定か定かの概念があります。書き手が表現する不定の物事は、適切な表現形式で「指示」することによって定の意味となり、読み手と共有する知識になります。

英語では、物事が数えられる外形存在であることを前提としており、不定であることは、単数形や複数形、不定冠詞といった文法形式で表します。定であることは、固有名詞や、定冠詞で表現します。

これに対して、日本語では、物事は数えられない代物（役割存在）であることを前提としており、英語のように不定と定を区別する文法形式を持ちません。例えば、「その車はすてきね。私もそれが欲しい。」という表現からは、その車そのものが欲しいのか、同種の車が欲しいのか特定が困難です。常識的に、その車そのものを奪い取ろうとしているということはないでしょうが、高額買取を希望している可能性も否定できません。この場合、前出の語句のどの視点について「指示」をしているのか聞き手に誤解のないように、物事の個別性を明瞭にする表現を補足する必要があります。

## 1.3.3.2. 書き方例

修正前	修正後
「その車はすてきね。私も <u>それが</u> 欲しい。」〔同一物か同種物か不明である。〕	「その車はすてきね。私も <u>同じものが</u> 欲しい。」〔同種物であることを明示する。〕
日本では様々なロボットが開発され、発達してきた。 <u>これは</u> 、幅広い分野から支持されている。	日本では様々なロボットが開発され、発達してきた。 <u>ロボットは</u> 、幅広い分野から支持されている。 日本では様々なロボットが開発され、発達してきた。 <u>開発は</u> 、幅広い分野から支持されている。 〔同じ名詞を繰り返すことで、視点が同じ、つまり同一物であることを示す。〕

## 1.3.4. 主語（視点）の用い方

## 1.3.4.1. 解説

英語は、出来事を複相事態として表す傾向が強く、出来事の開始から終点までを表現しようとし、これに対して日本語は、単相事態として、動きの推移（変化）の結果を表現しようとする傾向があります。こうしたことから、英語では「誰が何にどうする」という行為表現が多く見られ、日本語では「何がどんなだ」という状態表現が多用されます。

また、視点の表現法は、「理論編」（「視点の表現法」, 14 ページ）に挙げたように、日本語では、複数空間を前提とした内界視点を選択する傾向が強く、認識者視点が暗黙に仮定されることになり、書き手の人称表現はされません。英語では、単一空間を前提とした外界視点の傾向が強いため、位置変化の起点や力の源泉を示すため、主語が文頭に現れます（義務的に置くことは文法特徴でしょう）。(主語と主題の違いについては、「理論編」の「主語と主題の選び方」, 23 ページを参照)

こうした違いから、日本語の文は「誰の視点から叙述されたか」を不明瞭にすることが容易だけでなく、むしろ積極的に、視点を文脈に沿って自在に変えて見せることによって、読み手に情報を伝えることを好むように見えます（異時同図法の「鳥獣戯画」図（5 ページ）を参照）。しかし、解釈のゆれが生じにくい文章を書くためには、視点がそもそもいくつあり、それがどのように自在に変わるのかという、基本の規約は共有されるべきです。

では、視点とはいったい幾つあるのでしょうか。少なくとも、連鎖させる空間数に、それぞれの空間内の現れる認識者の数を合わせた数だけ視点はあるでしょう。もう少し広げると、文章内容に懸る利害関係者の立場の数だけ視点があるかもしれません。共感型の筋書を明瞭に書くには、書き手が視点を明確に想定して書き出す必要があるでしょう。

日本語には主語が書かれていないので、一文単位で見ただけでは、どの視点から述べられたのかわからないものの、「いくつの視点から、どのような構成で書かれ、どのような要素が置かれるか」が定まっていれば、「どの文がどの視点から書かれたものか」が察せるように書かれていなければならない。ここでは、日本語の文が文脈を持たない場合、いったいだれの視点でそう述べているのか

全く分からない例を挙げてあります。これをどう解釈し、表現すべきなのかは、次章の「パラグラフ」で紹介します。

#### 1.3.4.2. 書き方例

修正前	修正後（視点は、文脈によって定めるので、一文単位ではうまく修正ができない）
わが社の社員は残業が多い。	わが社の社員は残業が多い。〔書き手の視点〕 わが社の社員は残業が多い。〔書き手と読み手に共有された視点〕 わが社の社員は残業が多い。〔書き手と読み手、そして外部者の評価も合わせた視点〕

#### 1.4. 段（パラグラフ）

日本語文章表現における論の進め方は、個人の主張を全面に出すのではなく、書き手と読み手の複数の立場を慮りながら、最終的に合意を得られる落としどころを探るように書き進めることが多いと考えられます。このような書き方のためには、読み手と書き手の共通理解や共感を表す文は無主語で書き、各々の立場を明確にする必要がある場合にのみ、（行為主体としての）主語を使うことがよいでしょう。

##### 1.4.1. 「問題解決型」の文章構成のしかた

日本語の文章は、「起承転結」で構成されるといわれます（「理論編」では、共感型の筋書と呼んでいます）。一方で、「起承結」で構成すべきだといわれる場合もありますが、ビジネス分野の「問題解決型」の文書を観察してみると、「起承結」に「転」加えることが相応しいのです。

「起承転結」構成をとる際、個々の文（群）は、「起承転結」構成のどこに置かれるのかによって、果たす役割（導入や主題、共感など）が決まりますから、それを意識して、自ずと対応する視点を明示して書くことがポイントです。

下記の表に、問題解決型であって「起承転結」構成を持つ文章と、その中に典型的に含まれる文要素（「導入、主題、共感」など文（章）が果たす機能）と、それらが通常、誰の視点から書かれているのかを示しました。

表 1

構成	文の機能	文の視点
起	導入…主題をとりまく環境を示す文（群）。	<b>全体視点</b> …英語では、自分の主張にいたる背景を書くが、日本語では、皆が共感するに至らざるをえない背景を書くのであって、視点は筆者視点ではなく、筆者が読み手全体視点を代表して述べるものである。したがって、英語のような主語は文に示されな

		い。
	<b>主題</b> …文章の主題を示す文（群）。	<b>全体視点</b> …英語でいう thesis statement に似ている。英語との違いは、これが書き手の主張ではなく、文章の利害関係者全体の方向性を示すところである。したがって、英語のような主語は文に示されない。
承1	<b>問題提起</b> …主題文を述べることになった原因の概要を示す文（群）。	<b>全体視点</b> …書き手と読み手が共有する問題意識の概要を述べる。したがって、英語のような主語は文に示されない。
	<b>共感</b> …問題の詳細や実例を挙げたり、分析をしたりする文（群）。	<b>書き手の立場からの視点</b> …書き手の視点で述べた叙述である。主語を示すか、主語が分かるように書く。英語と異なり、読み手の共感を得られると思われる内容のみが述べられる。
		<b>全体視点</b> …英語でいう支持文に似ている。書き手と読み手にとって、議論の基礎となる共通知識を示す。したがって、英語のような主語は文に示されない。英語では、ここでは定量的なデータや、事実的な表現が求められるのに対し、日本語では、定性的、主観的だとしても、読み手に共感され得る内容であればよい。
	<b>帰結</b> …前述の内容から当然に帰結する結論を書く文（群）。	<b>融合視点</b> …書き手と読み手が、共通の知識から当然に得られる推論の結果を示す。したがって、英語のような主語は文に示されない。
承2	<b>真因分析 (1)</b> …ある立場から、問題の分析をする文（群）から成る。英語でいう支持文に似ている。聞き手には未知であった状況を伝える文（群）。	<b>書き手の立場からの視点</b> …書き手の視点で述べた叙述である。主語を示すか、主語が分かるように書く。
		<b>ある立場からの視点</b> …読み手のうち、ある立場を持つ叙述から述べる。誰の立場に関わるのか、主語を示すか、それがわかるような書き方をする。
転	<b>真因分析 (2)</b> …承 (2) の視点とは異なる <u>立場</u> から、問題の分析をする文（群）から成る。	<b>(2)の視点とは異なる立場からの視点</b> …読み手のうち、(1)とは異なる立場を持つ叙述から述べる。誰の立場に関わるのか、主語を示すか、それがわかるような書き方をする。
結	<b>結論文</b> …前出の複数の視点から、共通の理解を得た文（群）。	<b>融合視点</b> …英語の結論文に似ている。英語は、支持を表すから導かれる（頻度主義的な意味で）蓋然性の高い結論を得ようとするのに対し、日本語は、複数の関係者の立場から、共通の納得が得られる（尤もらしい）結論を得ようとする。

この表内の（太字で示した）視点が、決まって文章に現れるというわけではありません。しかし、

いわゆる日本語の主語無し文が、「英語文章でいう主語の省略である」と捉えるのではなく、実は“全体視点・融合視点であることを積極的に示している”ことを理解し、主語を明示しない手法を用いることが重要です。

#### 1.5. おわりに

本資料では、説明に至りませんでした。文と文、パラグラフとパラグラフの関係を表す接続語句の使い方についても、「理論編」で説明する概念を用いて、今後、検討を進める予定です。